Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-09-07

狩猟採集

窪田, 幸子

(Citation)
文化人類学事典:182-182

(Issue Date)
2009-01

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001845

狩猟採集

hunting and gathering

狩猟採集という生業形態は，人類にとって最も基本的な食料獲得の方法である．約1000万年前に始まった農耕，牧畜という積極的に外界の環境を改変して，食料を生産するという安定的な生業に比べて，狩猟採集は，自然環境に手を加えず資源を直接利用するだけの，それだけ人口支持力の小さい不安定な生業形態とのイメージが強い．かつて地球上に広がった人類は，すべて狩猟採集で暮らしていたわけだが，農耕，牧畜という生産を行う生活の形が成立して後，農耕民，牧畜民はその生活域を広げ，反対に狩猟採集民はその生活域を狭めていったことは確かである．そしてさらに，産業革命後の世界の大きな変化の中で，狩猟採集民の生活はさらに狭められ，改変されることになっていった．

狩猟採集という生業は，一般にはおそらく，原始的で，不安定で，飢えと常に隣り合わせの，非常に非合理的なものだというイメージが強いだろう．また，男性は狩猟，女性は採集との男女分業があり，男性が主要な食料を獲得すると思われており，それゆえに女性の地位は低いとのイメージも広く広がっている．しかし，実はこれらのイメージは正しくない．まず，狩猟採集は，環境適応がたくみで，幅広い地域でその活動を展開してきている．柔軟性に富む生活形態といえる．農耕や牧畜は，それぞれその生産を成り立たせるために，ある程度の降水量と温度を必要とする．それに対して，狩猟採集は自然資源を直接利用するのであるから，狩猟採集できる資源がある場所であれば，どこでも生活できる．後述するように，現存する狩猟採集民の分布をみてもその環境は多様であり，この生業の有用性を物語っている．

また，狩猟採集は，常に飢えと隣り合わせの不安定なものであるとは，必ずしもいえない．狩猟採集をする生活集団の規模は一般に小さい．当該の環境で得られる食料で十分に豊かな暮らしが可能な人口規模で暮らすのが狩猟採集社会であるともいえるだろう．問題になるのは人口が増加した場合であり，普通，狩猟採集社会では，それを人が移動し，分散することで解決してきた．つまり，狩猟採集社会はそう簡単には深刻な飢餓には陥らない．むしろ，農耕社会の方が，労働を半年に集約するため，問題が起きれば1年分の食料が危機にさらされるわけであり，飢えはさらに深刻となることはよく知られている．ただし，このことからもわかるように，狩猟採集社会はあくまでも人口規模が小さいことが基本であり普通であった．そのため病気や災害が起きると，一つの小集団が完全に消滅してしまうなどの大きな変化は容易に起こったといわれている．その意味では確かに狩猟採集社会は不安定なのはいうまでもない．

さらに，狩猟採集という生業は，主に男性の狩猟に食料を依存する，男性優位社会というイメージも強いものであろう．しかしこれもすべてにつうじるものではない．多くの狩猟採集社会では，確かに男性が大型，中型の動物を中心に狩猟を行い，女性は，植物資源，中小の動物を採集する．労働力が少なくてすむ採集は女性が担当する場合が圧倒的に多く，子どもの養育などの男女分業のうえでそれが合理的な分担であるとされてきた．しかし，実際には男性の狩猟物がいつも重要なカロリー源を供給しているわけではないということが，次第に明らかになり，1970年代の狩猟採集民学会では，大きな議論となった．女性の採集物の総量のカロリーを計算すると，アフリカのブッシュマンでも，オーストラリアのアボリジニでも女性の採集による貢献は全体の60～80％にもなった．多くの狩猟採集社会がそうであることがわかったのである．採集は収穫が安定しており，少ない労働力で食料が確実に獲得できるためである．ただし，カナダのイヌイットや極北インディアンなどは，狩猟物がカロリーとしても圧倒的に大きな割合を供給している．ただしそれは彼らの暮らす地域の植物相が極端に乏しいためである．つまり，基本的には，狩猟採集社会の経済的基盤は，採集によっているといってよい．

地球上に現存する狩猟採集の人々としては，アフリカには，サン，グイ，ガナなどのブッシュマンと呼ばれていた人々，ムブティ，アカ，バカなどのピグミー諸族，ハザ，ドロボなどがおり，アジアには，アンダマン島民，マレーのセマン，フィリピンのネグリートがいる．南北アメリカには，アリュート，オジブワなどのインディアン，フェゴ島民，シリオノなどのインディオ，そしてイヌイット（エスキモー）がいる．そして，オーストラリアには，アボリジニの人々がいる．現在は，彼らはいずれも国家の一部に取り込まれ，定住化し，それぞれの国の少数者政策のもとにあり，その生活を大きく変化させている．しかし同時に，狩猟採集という彼らの生業を何らかの形で維持し続けている場合がほとんどである．

オーストラリアの大陸北部のアボリジニもカナダ極北に暮らすイヌイットも，20世紀に入って政府やキリスト教ミッションの指導のもと，定住した．彼らは，数百人から時には数千人を超える村で，近代的な住居に暮し，学校教育を受け，医療を受け，さまざまな新しい職業につき給料を受け取り，商店で食料を購入するという生活を送る．いずれも近代国家の福祉制度のもとで，失業保険や年金などのさまざまな社会福祉のお金も受け取っている．こうした貨幣経済に依存した生活を送っている一方で，狩猟採集も現在もさかんに行っている．

イヌイットの人々は，モーターボート，四輪バギー，スノーモービルを移動の足とし，散弾銃やライフル銃を使って，カリブー，アザラシ，セイウチなどを狩猟し，魚網でホッキョクイワナをとる．カリブーは1年をつうじて狩猟するが，冬の方がスノーモービルで動けるのでより活発に行われる．男だけが数名で狩猟

集団をつくって時には泊りがけの狩猟の旅に出かける．アザラシも11～12月，4～6月にさかんに狩猟が行われる．冬の氷上でのアザラシ猟は，氷の状態，アザラシの生態など自然についての豊かな知識に裏づけを必要とする狩りであり，誰でもができるものでない．だからこそ，アザラシの猟はイヌイットらしい狩りとのイメージが強い．

イワナは，9月から11月にかけて特にさかんに漁られるもので，川にヤナをつくって魚網で捕らえる．これらの狩猟採集の旅は，必ず親族集団を中心につくられる．また，狩猟採集で得られた獲物は，親族集団のつながりの中で分配される[3]．

一方，アボリジニの人々は，四輪駆動のランドクルーザー，モーターボートを使い，散弾銃とライフル銃を使って狩猟をする．男性は，カンガルー，鳥類，海ガメ，ジュゴン，魚類などを取る．女性は，貝類，根茎類，木の実，ハチミツ，トカゲ，魚，カニ，エビ，トカゲ，カメ，幼虫，卵なども取る．先に述べたように，アボリジニの場合も食料の60％以上を女性が獲得していたことが知られている．アボリジニ女性が取るものは，いずれも採集が比較的簡単で高い技術を必要としない．地域の自然環境の知識が十分あれば，かなり確実に食料を獲得することができるのである[1]．

このように，アボリジニもイヌイットも近代設備の整った町に暮らし，商店で食料を購入するようになっても，仕事のないときには，ひんぱんに狩猟採集を行う．定住村の人の間では，商品として購入する食料の割合はいわゆる伝統的食料に比して，近年高くなってきており，60～80％にもなるといわれる．それでも，彼らは狩猟採集で得られる食料にこだわり続けており，しばしば狩りに出かける[5]．現在の彼らにとっていったい狩猟採集はどのような意味をもつ活動なのだろうか．

一つには，彼らのアイデンティティのよりどころとして，レトリックに使われるものであるだろう．「我々は，ハンターである」というのは，いずれの狩猟採集民社会でもよく聞かれる語りである．カナダでもオーストラリアでも，大きく変化する社会の中にあって，他に対する自分たちの表象が必要となる事情も共通している．「寒さに強く，環境についての豊かな知識に基づいて熟練した狩猟の技術をもつイヌイット」であり，「自然と動植物の生態についての深い知識をもち，気配を消して足音を立てずに近づくことができ，槍での狩猟が巧みなアボリジニ」という表象である．狩猟採集は，まず，彼らのアイデンティティ表象として重要なのである．

同時に，彼らの狩猟採集の獲物についての知識は主流社会の文脈で，価値ある重要な知識体系として評価される．狩猟採集という生業は，自然についての知識を基礎とする．いずれの狩猟採集民も，非常に豊かで広く細かな，自分たちの暮らす地域の自然についての知識をもっている．しかも，その知識体系は，彼ら独

自のものであり，西欧主流社会の自然についての理解の体系とは異なるものである．自然環境についての代替的なアプローチが求められている現代社会において，狩猟採集民の自然環境についての知識は，貴重な地域的知識（ローカル・ノレッジ）として注目されることになる．

また，狩猟採集という活動をつうじて人間と自然との間に密接な関係が構築されること，そのこと自体が彼らにとって重要な意味がある．これらの独自な世界観，神話体系，土地との関係は，すべて彼らを取り巻く自然から生まれている．彼らの創世神話や精霊との関係は，狩猟採集という自然と直接密接に関わる活動によってはじめて，具体的なものとなることができる．狩猟採集によって，獲物を獲るという行動をとおして，動物や植物との関係をそれらが神話的に重要な場所で取り結ぶ．こうして彼らは自分たち独自の世界を経験することができ，その世界観をリアリティのあるものとして受け取ることが可能になる．たとえ，車やライフルを用いて行う狩猟採集であっても，この意味の重要さは変わらない．

そして最後に，スチュアートも指摘するように，狩猟採集はレクリエーションとしての意味があるだろう[2]．狩猟採集は，農耕や牧畜の社会でも補足的に行われてきたことはよく知られている．こうしたいわば残余の狩猟採集の中には，主要な食料を得るということよりも，それを採ることに特別の意味が付与されたり，それを食することが季節を象徴していたりするものがある．これらは，松井がマイナーサブシスタンスと呼ぶ活動であるが[4]，そのような狩猟採集活動は，しばしば大きな困難を伴い，それをとることについての名人と呼ばれる人が生まれたりする．こうした活動は，現在の日本の山村でもよくみられることである．人々は，こうした狩猟や採集の活動に大きな喜びを見出しているのであり，レクリエーションとしての狩猟採集と呼ぶことができる．現存する狩猟採集社会の人々は，決して農耕や牧畜を行っているわけではないが，彼らの生活の糧の大部分は現金を介して得られる生活になっている．そうした状況の中で，彼らが行い続ける狩猟採集は，日本の山村や漁村でのマイナーサブシスタンス活動に相つうじるものとなっているといえる．

［窪田幸子］

参考文献

[1] 窪田幸子「女が神話を語る日」スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在―生業文化の変容と再生』言叢社，pp. 53-124，1996
[2] スチュアート ヘンリ「現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義―民族と民族学者の自己提示言説をめぐって」スチュアート ヘンリ編『採集狩猟民の現在―生業文化の変容と再生』言叢社，pp. 125-154，1996
[3] 岸上伸啓『極北の民―カナダ・イヌイット』弘文堂，1998
[4] 松井 健『文化学の脱＝構築―琉球弧からの視座』榕樹書林，1998
[5] 窪田幸子『アボリジニ社会のジェンダー人類学―先住民・女性・社会変化』世界思想社，2005